この人を訪ねて＃223

老舗履物問屋を営み ジャズレコード愛好家

株式会社橋本商店　社長
橋 本 良 裕（はしもと よしひろ）さん 73 歳

昨年十一月創業百年を迎えた老舗履物問屋を営む三代目の橋本良裕さん。趣味はジャズレコードの収集と鑑賞。仕事が終わり帰宅前の2時間余、レコード傾聴に至福の時間を過ごす。趣味がこうじてジャズレコード・コンサートを開いたりや解説本を執筆中と聞く。

ジャズレコードコンサート

草津公民館だよりに、今年1月29日(日)同館で「ジャズレコード コンサート」が行われるとの予告記事が出ていた。コロナ禍のため人数制限があったが、当日同館の大集会室には、開場前から定員いっぱいの人が詰めかけていた。草津にもジャズが好きな人がこんなにもいるのかと驚いた。主宰と解説は、レコード愛好家の橋本良裕さん。プログラムによると二部構成で、第一部はジャズスタンダード曲の聴き比べをディスクジョッキー形式で行われた。戦前、戦後に録音された有名な演奏者のレコードを解説を交えての3曲サニーサイド、スターダスト、枯葉。

第二部は極め付きの名演奏を聞いてみようと題して6曲(A列車で行こう、クレオパトラの夢、テイクファイブ、君ほほえめば、帰ってくれてうれしいわ、世界は日の出を待っている)。いずれも橋本さんのコレクションの中から選んだものばかり。プログラムの各曲の横には、「QR・二次元バーコード」が記されており、スマートホンで聞くことができるサービスもついていた。

ジャズの〝食わず嫌い〟を治してほしい

橋本さんは冒頭のあいさつで、「地域の人たちに何か役立つことは出来ないかと常日頃考えていた。今日はコンサートが出来てうれしいです。ジャズは難しい、やかましいといわれるが、今日は食わず嫌いを治して帰ってほしい」と話した。ところで橋本さんの本職は、広島商工センターにある創業百年続く履物問屋(靴)の三代目の社長さんだった。

履物屋さんから靴卸問屋へ

㈱橋本商店は、広島市中区本川町(旧鷹匠町)で、下駄(げた)や草履(ぞうり)を取り扱う小売履物屋だった。1980年代に現在地の広島商工センター問屋街に移転し、「靴」を卸すことを生業にすることになった。

初代の祖父は、広島市安佐北区中深川出身で、先代の父故栄一さんの長男として、橋本良裕さんは生まれた。舟入高校から、立教大学経済学部を1978年(昭和48年)に卒業。「本当はどこかの会社に行きたかったのですが、家業を継ぐことになりました」。1998年(平成10年)父の後を受けて代表者に就任。「幸い取引先にも恵まれ、会社は大きく発展しました」。仕入れ先はもっぱら全国生産の約8割を占める屈指の「靴の街」と言われる神戸市長田区にあるメーカーからが主である。

「靴の街」神戸 長田区について

神戸は明治時代より外国人居留地として発展し、下駄の鼻緒や草履を作っていた職人たちが、外国人の靴修繕から次第に「靴づくり」に移り、「京都の着倒れ、大阪の食い倒れ」と同じく「神戸の履き倒れ」と言われるほど靴文化が開花した街だ。戦時中のゴム不足を経て、戦後すぐに「塩化ビニール」を靴材料にした「ケミカルシューズ＊」が開発された。デザイン性が高く、爆発的に人気だったが、その後のバブルの崩壊や、1955年(平成7年)に起こった阪神淡路大震災で、約8割の靴メーカーが打撃を受けた。その後裁縫や裁断など一定の品質基準をクリアした新しい靴づくりが始められた。むろん、革靴の生産も多く、季節、趣向により変動する。

(＊ケミカルシューズ：ゴム底、表面は合成皮革や雑材(布)などの化学合成品を用いた靴。革製と価格、製品面での差はなくなりつつある。)

卸先は関東以西九州までのデパート

橋本商店が仕入れた靴の卸先は、関東以西九州までのデパートである。扱う靴は前述の国産品で、輸入品に比して高品質で、価格が高めである。スーパーなどでは値が合わないし、価格が高くてもその価値を認めて、デパートで購入する顧客を対象としている。

婦人靴に特化

元々、橋本商店は紳士靴も扱っていたが、現在では婦人靴のみを扱っている。「広島でアジア大会(1994年)があった前後、バブルがはじけた頃紳士靴の取り扱いを辞め、女性靴のみに切り替えました」と橋本さんは話す。「男性の持ってる靴の色ほぼ黒に茶色もありますが、ほとんどが黒一色であり、種類も少ない。そのうえ男性は一足を一年中履いており、梅雨の長雨時に濡れて型崩れでもしないと買わない(笑)。その点女性は洋服に合わせ、流行に、季節により履き替える。一人で何足も持っており、圧倒的に女性靴が売れます」「それに男性は小遣いが少なく、靴にあまりお金をかけませんから…」と経営的にも女性靴にシフトした理由を説明。

靴の卸は〝お天気商売〟

外国製の靴も扱うが、日本人は品質にうるさくそんなに粗悪なものは輸入しない。外国の業者は日本は量を買わないくせに品質にうるさい国だというらしい。欧米は汚れたり、糸がのぞいていてもあまり苦情は出ない。生活習慣の違いかもしれない。だが、中国人はさらにうるさい。デパートで散々履き比べて、別の靴を出させ、買わずに行ってしまうという(笑)。

橋 本 良 裕
（はしもと　よしひろ）
㈱橋本商店：広島市西区商工センター2-9-32 広島市西区草津南二丁目在住
1950年2月生まれ.大川小.大手町中学市立舟入高等学校、立教大学経済学部'73年卒　家業に従事し、'98年代表者就任 ジャズレコード収集愛好者として'23年1月草津公民館にてレコードコンサート開催　家族:妻3 子女1 男孫4人

草津公民館でのレコードコンサート風景

上:レコードジャケットを見せながら解説中

倉庫内の展示棚にて. 長男は新しい靴のブランドを開発し四代目を継ぐ予定　通信販売や小売りもやっている

右:棚にレコードがビッシリ. 両手で静かにセットする ホコリ,湿気が大敵だ

夫婦で沖縄旅行. 妻慶子さんは英語の歌が好きで,橋本さんの影響でジャズボーカルを習ってる

下:昨年夏からスポーツ吹矢を習い、先日2段に昇段した

広島商工会議所から創業百年表彰

靴の卸は〝お天気商売〟ですと橋本さんは笑いながら話す。景気に左右されるのは当然、季節が変わる度、しかも寒暖がはっきりするときはよく売れる。「仕入れも天気を予測して経験と勘でやってます(大笑)」と。

ラジオから流れるジャズに魅せられて

橋本さんがジャズに魅了されたきっかけは、中学2年のときにラジオで聞いたジャズ音楽が、高校2年のとき再びNHKラジオからが流れてきた。すぐに曲目を書き留めて、親に小遣いをもらいレコード屋に駆け込んだ。大学ではジャズ研究会に入部。当時FM東京が開局試験放送で、ジャズを流しており、授業をさぼって急いで下宿に聴きに帰るぐらい熱中した。中区土橋の「喫茶中村屋」の主人が高校の同級生で、一緒に聴いて彼をジャズファンに引きこんだ。

ジャズの歴史について橋本さんは話す

：★ジャズが起こってから約120年が経つ。米ルイジアナ州の港町、ニューオリンズで19世紀～20世紀初頭にアフリカ系黒人労働者の感情を表現する音楽として発生した。★トランペットやトロンボーンなどの西洋楽器でブルースやタイムラグが生まれた。その頃活躍したのが、サッチモと呼ばれたトランペットのルイ・アームストロングがおり、白人5人組のデキシーランドジャズ・バンドも活躍した。★その後スイングジャズのグレンミーラー、デュークエリントンらのビッグバンドが米国各地のダンスホールで演奏した。★20世紀半ばから、若手ミュージシャンがニューヨークハーレム街で即興を中心とした後にモダンジャズの基になるビ・バップジャズが生まれた。「アートブレーキー・メッセンジャーズ」の「モーニン」は有名である。

レコード聴くのに手間ひまかける

橋本さんが居住しているマンションでは近隣迷惑で、レコードは聴けない。会社の倉庫の1階にオーディオセットを置いて聴いている。棚には約千枚のジャズレコードがある。その日気に入ったレコードを親指と中指3本でケースから取り出し、ホコリをふき取り、両手でターンテーブルにおき、静かに針を下す。ジャケットの解説を読みながら両面を聞き終わると、ホコリを払い、ジャケットに戻すこの一連の動作、ルーチンが、CDでは味わえないものだという。「最近フリーマーケットで、30年以上探していたデュークエリントンとジャンゴラインハルト共演の3組レコードを手に入れました。うれしかったですね」。

いま心配事は、「南海トラフ巨大地震が来るとここは低いのでレーコードが水没することですかね(大笑)」。

今日も仕事が終わっての至福の時間を過ごしておられることでしょう。

（編集　倉田和峰）